「命のパンに生かされる」
ヨハネによる福音書 6 章 34～40 節

当方も今年（2023 年）で、満 73 歳を数える年齢になりました。73 ともなると、身の周りにいろいろなことが起こってきます。両親を含む家族の健康問題もそうですし、各家庭の構成や進路の変化もそうです。そうしたなか、自分もいよいよそういう年になったんだ、とつくづく思わされることの一つに、知人や友人の訃報というのがあります。多くの場合、年が自分より上の者が召されるのが普通ですが、かといって、同年輩の友人や年下の知人が急逝しないともかぎりません。実際、多くはないものの、時にそうした知らせが舞い込んで驚かされることもあります。ちなみに、友人でも知人でもありませんが、そんな例の一つと言えるでしょうか。クラシックを聴かれる方は覚えておられるかと思います。22 年前の 2001 年春、一人の指揮者が急死したとのニュースが流れました。ジュゼッペ・シノーポリというイタリア生まれのユダヤ人ですが、医学と哲学の 2 つの博士号を持ち、考古学にも精通していたという異色の指揮者でした。新聞によれば、そのシノーポリが歌劇の「演奏中・・・意識不明になり、指揮台から崩れ落ちた」というのです。心臓の発作でしたが、54 歳の若さでした。当時、楽界の注目を浴び、その才能に大きな期待が寄せられていた最中の出来事で、有能な人物が若くして突然に世を去ったとのニュースは世界を驚かせました。シノーポリの場合、真偽は不明ですが、もしかすると 過労や不養生があったのかもしれません。ただ、この思わぬ訃報に触れたとき、私の内にどこからともなく湧き上がったのは、事はなんとも残念なものだけれど、がしかし こうした出来事は必ずしも特別なものでもないのでは・・・、という感覚でした。そこには、他人事とも言い切れないものがある。この自分がそれと全く無縁でいられるとの保証がはたしてあるだろうか、という思いでした。考えてみれば、突然の別れというのは たしかに、決して珍しいものでもないのでないでしょうか。この間まで元気で、つい最近も顔を合わせたあの人が、予想もしない病気や事故でこの世を去ってしまった。突然の災害や事件で私たちのもとからいなくなってしまった。友人や知人の、また家族のそんな出来事を振り返るにつけ、そう思わされます。そして、こう思わされるのです。この自分がここにこうして生きている、というのは当たり前のことではない。それは決して自明のことではなく、軽いものでもない。それは反対に、重く大きなことであって、意味あることに違いない。なんということもないのではなく、なんということがあるに違いない、と。少なくとも、私たちはまだ生きているのですから、そうであれば、与えられている命を大切にして生きたい、と思うのはしごく当然なことではないでしょうか。

この「命」ということについて、聖書は、一読して分かるように、そこかしこで触れています。それは間違いなく、聖書の全体を貫く中心的かつ本質的なテーマの一つと言えるでしょう。今月の箇所もまた同様で、イエス・キリストは前回から引き続き、御自身が与えられる そのいのちについて言

葉を続けておられます。人生とは誰にとっても、またどこにおいても平坦ではなく、様々なことがあるもの。心弾む薔薇色の時もあれば、心沈むブルーな時もあるにちがいありません。だとしたら、私たちは繰り返し、自分はどこに立っているのだろうかと、拠って立つ その拠りどころを見詰め直すことが大切なのではないでしょうか。でないと、見えるあれこれに翻弄され、あちらに行ったりこちらに行ったり。薔薇色とブルーの間で揺れ続けてしまいます。現実をしっかりと見据えつつ、が同時に、見えないところに息づく真のいのちに目を凝らすこと。そのことが必要なように思われます。聖書に言われる「福音」とはすなわち「良き音信」のことですが、それは一つには ほかでもない、このいのちにあずかる者とされることを意味しています。そして、それは言い方を換えれば、肉の命を真のいのちで生かしていただく、ということにもなるでしょう。私たちは誰しも、今ある命を無意味に費やしたくはない。そのようにして 無駄にはしたくない、と思っているのではないでしょうか。それはあまりにもったいないことだからです。であれば、真のいのちを説かれる主イエスの言葉は 今月もまた、私たちの心に響いてくるように思われます。

人々は、主イエスに言いました。34 節、「**主よ、そのパンをいつも わたしたちにください**」。覚えておられることと思います。4 章で学んだサマリアの女性も、ヤコブの井戸の傍らで同じようなことを言いました。「**主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください**」(4：15) と。想い起こせば、イエス・キリストに信頼を置き、主イエスをその内に迎え入れること。渇くことのないいのちの水を飲む、とはそういうことで、それがそこで意味されたことでした。ですが、サマリアの女性は初め、そのことに気づきませんでした。そして、今回の人々もまた、気がつきません。主イエスの言わんとされる その真意に思いが至りません。主イエスを信じて、自身の内に迎え入れ、その言葉に信頼して 従い歩むこと。それが「**（天からのまことの）パン**」(6：32) を食べるということであり、「**（神の）パン**」(6：33) を食すということなのに、それが分からない。さらには、主イエスがこれを知って、「**わたしが〔その〕命のパンである**」(35) と言葉を足し、説明を加えても、それでもまだ 事の理解に至りません。そればかりか、よく見ると、主イエスはすぐにも続けて「**わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない**」(同) と さらにも噛み砕いて、解説擬きの言葉まで添えておられます。にもかかわらず、先を読み進めると分かるように、彼らはそこまでしてもらっても 結局、肝心要の事の中心に心が向きません。見えるパンを通して、その向こうに見えないパンを見る。肉のパンを通し、いのちのパンという それに増すパンのあることを知る。そして、主イエスの許に来て、これを信じ、これを内に迎え入れることが すなわち、主イエスを食べるということであること。それが主イエスの伝えんとされたメッセージの中心であるのに、人々の思いがそこに至ることはありませんでした。それは、主イエス御自身の言葉を借りるなら、「**パンを食べて満腹したから**」(6：26)。つまり、肉のお腹を満たす見えるパンのことばかりに夢中になっていたからではないでしょうか。実際、人々はどこか 皮肉な思いも交えて、天からのパンを求めたようにも読み取れます。当時、来たるべき救い主は旧約時代のマンナを再びも

たらしてくれる、と 人々は考えていました。そんな彼らに対し、主イエスは、この私が神に遣わされた者である、と そう言われた (6：29)。そこで、「ならば・・・」と、これに対して 人々が返したのが続く 30 節以下の言葉でした。そこに込められた彼らの裏の思いを推しはかって これを読み解くなら、こんなふうになるでしょうか。ならば、マンナをくれ。5 つのパンと 2 匹の魚で 5,000 人を満腹させたからといって、一回きりじゃ どうにもならない。荒れ野を旅した我々の先祖は、40 年の間ずっと、天からのパンで養われ続けたんだ。我々にも同じように、パンをずっとくれ。いつもくれ。救い主なら、それができるはずだ。人々は内心、そんな思いを抱いて、主イエスに迫ったのではないでしょうか。けれども、前回も申し上げたとおり、イエス・キリストは、見えるしるしを欲しがる彼らの求めには応じられません。そして、代わりに こうおっしゃられるのでした。

「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない」

私たちはこれまで繰り返し、「ヨハネによる福音書」から 信仰の語りかけを聴いてきました。そうしたなか、読み進めば進むほど、ヨハネ福音書の特徴がいよいよはっきりしてきたのではないかと思われます。すでに御説明したとおり、他の 3 つの福音書に比べ、ヨハネのそれは思索的な趣が強い、ということです。それは、私の理解するところでは すなわち、信仰の核心に触れる本質的な事柄を練られた言葉で凝縮させている、ということなのですが、しかしまた それはその一方で、生活感の薄い抽象的・観念的な書ととられなくもありません。今回の「わたしが命のパンである」との言葉もどこか抽象的・観念的で、実感として いまひとつピンとこないように感じられるかもしれません。しかし、ぜひとも忘れていただきたくないのは、ヨハネの福音書が普通の人々の、しかもその日ごとの生活の中で著わされた書だということです。そもそも、福音書編纂の先駆けとされるヨハネからして、ガリラヤの漁師の出でした。いわゆる学者とはほど遠い人物です。そのヨハネから始まる教会の人々が福音書を記してまとめたのは、紀元の 90 年代のこと。エルサレムから小アジア（現在のトルコ主要地域）に及ぶ一帯のどこかで完成したものとみられます。キリストに従う者たちは当時、国の内外から迫害を受けていました。ユダヤを治めていた 時のローマ帝国からすれば、なんとも妙な新興宗教です。公認のユダヤ教でも警戒の対象なのですから、得体の知れないそれにはなおのこと、監視の目が向けられます。占領下の体制を乱したり侵したりはしないかと危険視され、実際、そうした圧力のもとにありました。他方、ユダヤ人が先祖代々の伝統的なユダヤ教を捨て、キリストの群れに加わるわけです。国内的にも当然ながら、ユダヤ教から迫害の手が伸びます。宗教的・社会的のみならず、日常の生活面でも支障が生じ、故郷を追われるようにして 地中海沿岸の町々に散らされた人々もいました。迫害の手はとりわけ、紀元 70 年を機に、その激しさがいっそう増します。この年、ローマとの戦いでエルサレムの神殿が炎上し、エルサレムが陥落。神殿礼拝の場を失ったユダヤ教は ここに至り、律法の教育とその遵守の徹底によって祖国の一致を図るほかなくなりました。内側からの体制の強化であり、その結果、さらにも強められたのがほかでもありません。自分たちと異なる者らへの迫害であり、異分子キリスト教徒の排除でした。民族的なアイデンティ

ティーを堅持し強化する術と言えるでしょうか。（詳しくは、2017 年 4 月掲載の「はじめに」所収「『ヨハネによる福音書』を読む前に」を御参照）キリストに従う彼らクリスチャンはこのようにして、歓迎されざる者として 国の内外から迫害され、様々な困難にみまわれていました。しかも、まだまだ小さな群れです。そんな彼らにとって、イエス・キリストを信じるとは単なる気の持ちようなどではなかったろうと思います。また、神秘的な体験に浸って この世から逃避し、自分たちだけの世界に籠もるようなものでもなかった。それは日々の闘いであり、生活のただ中での闘いだったはずです。そのただ中で、主イエスから真実 いのちのパンを頂き、そこで力を得て生き抜いていく。私たちの日常の不便さをはるかに超えた、想像できないほどの困難と厳しさの中でそうしていく。彼らが置かれていたのは、抽象的・観念的な世界とは正反対の、そのような具体的・日常的な生活の現実だったのではないでしょうか。そして、彼らはまさにそこで イエス・キリストの真実に生かされ、その情況を切り拓いていったということです。私たちはこのことを、ヨハネの福音書の背後に忘れることなく読み取りたいと思います。主イエスの内に真のいのちを見出し、その主イエスをいのちのパンとして自身の内に頂くことでもって、彼らは初めて、その時代を確かに生き抜くことができたのですから。

ところで、この連続講解の初回 2017 年 4 月に「五千人の給食」の箇所（6：1～15）を扱った際、カトリックの犬養道子さんの言葉を御紹介しましたが、覚えていらっしゃるでしょうか。6 年前の 2017 年に 96 歳の長寿を全うされ、すでに天に召されておられますが、第二次大戦前の五・一五事件で暗殺された犬養 毅 首相の孫娘に当たる方です。戦後、戦争犠牲者などの難民救済を中心に、アジア、アフリカ、ヨーロッパ等で長年にわたって精力的に活動されました。その犬養さんは実は元々フランスやアメリカなどで聖書学や哲学を学んだ方でもあって、学者としての一面も持っておられました。そうした関係で、『聖書を旅する』と題し、聖書にまつわる様々なトピックについて書き著わしてもおられます。その中の旧約聖書を扱った巻に、絶対者を想う、すなわち「神」を想う人間の思いに触れて、エッセイ風の 次のような感想を記しておられます。面白く、かつ 読む者に問いかけ考えさせるような一文ですので、御紹介いたしましょう。

筆者はずいぶん いろいろな国に行き、いろいろな人に会い、ゆっくりと話しあいもした。その結果・・・つよい、やみがたい、無限・不滅への希求〔すなわち、心からの願い求め〕は、どこの土地の人の心中にもあることを、経験として体験として知った。

・・・人間・・・が、どこのだれにでも、共通する希求を持っているということは、「その希求を満たす者・・・」が「在るから」ではなかろうか。「満たす者」からいまはなれた状態にわれわれがいるから、ではないか。

こう考えて来ることは・・・人々が言うような「・・・主観の産物」〔つまり、勝手な思い込み〕・・・のせいではないと思われる。

ヤーウェとか「在る者」とかのなじみの薄い単語を「人の心をとこしえに満たす者が

いつもいる」と置きかえてみたら、日本人にとっても身近になるのではないだろうか。

カトリックの神学の底流にある考え方の一つとも思われますが、聖書はたしかに、旧約聖書の知恵の書「コヘレトの言葉」で「神は・・・永遠を思う心を人に与えられる」(コヘレト 3：11)と語ってもいます。言葉を換えれば つまりは、この世界の背後には確かに永遠なる神がおられ、私たちのすべてはその御手(みて)の中で許され、そこで存在させられてある、というようになるでしょうか。聖書はそのことを教えるものであり、私たちに求められているのは ですから、その神を想う思いを大切にし、そのようにして 神とのしかるべき関係のもと、そこで与えられるいのちにあずかることではないか。それが聖書の言わんとするところであり、犬養さんの思いも詰まるところ、そこにあるように思われます。そして、それはすなわち、私たちの心の目を開くことであり、魂の目を開くことだろうと思います。犬養さんは別の所で、次のようにも述べておられます。

聖書は・・・〔肉体の〕「死」も「死」と呼ぶ。しかし、聖書的意味あいでの、ほんとうの「死」は、肉体という有機物の集合体の分解ではない。

よく人は言うではないか、安楽にけっこうに身は暮(くら)し、おいしい上等なものを口は食べているのに、心は悶々(もんもん)と楽しまず、萎(な)えはてて・・・など。・・・

魂の死。

心のくらやみ。

この「死」の方が実は からだの死よりずっとおそろしい。なぜなら、くらやみにおちこんだ心や、死に瀕(ひん)した魂は、なんと度々(たびたび)、他人の心やからだをも平気で殺したりこわしたりしてしまうことか。・・・皮肉にも、くらやみのわざは科学が発達して独走すればするほど 多く 且(か)つ深刻に出て来る。

からだの死よりもっと無限におそろしい、この、魂の死とは何なのか。

この、おそろしい死は、神の創造によるものでないと 聖書は書くのである。

・・・人間が、どこかへ行ってしまった。

だから、さがしにゆかねばならない。

実際、私たちは今日(こんにち)、いともたやすく心が壊され、魂が押し潰される時代に生きているようにも感じられます。それが時に、あからさまにさえなされているような・・・。どこか 内なる感覚が麻痺(まひ)した時代、と言ったらよいでしょうか。そうした現実は 例えば、本来 最もそうであってならないはずの学校にまで及んでいるようです。いじめ社会の現状をルポした本の中に、次のような詩が記されていました。「学校なんて大きらい／みんなで命を削るから／先生はもっときらい／弱った心を踏みつけるから」。自宅の物置で首吊(くびつ)り自殺をした中学 3 年の少女が遺(のこ)した詩です。そして、その同じ本の中に、教員のこんな言葉も。「教員になって最初に気がついたのは、子どもに対する言葉。バカにする、けなす、悪口(あっこう)を言う。子どもの失敗を同僚間で笑い合

う。やがて、自分も似たようなことを言ったりしたりしているのに気がつき、ゾッとした。宝物であるはずの子どもを笑い物にする。子どもはテレパシーでそれが分かるんです。そして、傷つき、教師を信用しなくなる」。一人の教師の正直な告白です。学校の子どもたちはおそらく 実情の一部にしかすぎず、同様なことが私たちの周囲で日常的に起きているのではないでしょうか。その一端を、自分も気づかずに担っているとしたら・・・。なんとも怖いことです。問題の根はいったい、どこにあるのでしょうか。それは、人はそもそも、誰もがただ一人しか存在しない、取り替えの利かない かけがえのない者としてこの世に生きているということ。しかも、単なる肉の存在以上の者として生かされているということ。そのことを忘れるところから来ているとは言えないでしょうか。

聖書は間違っても、私たちを「物」とは見ません。取り替え可能な物。比較をし、出来の良いものだけを残して、出来の悪いのは捨てる。人がしばしばするそのようなことを 聖書はしないし、その聖書が証しをするイエス・キリストは決してなさらない。それが、聖書とその主イエスに向き合うときに覚えておくべき基本の基本と言ってよいでしょう。主イエスは、この私が私であるという ただそのことだけをもって、私たちをかけがえのない存在として受け止めてくださる。しかも、単なる肉の存在以上の者として、御自身のいのちをそこに息づかせてくださる。十字架の上に体を裂かれたというのは、それを現実のものにする御業と言えるのではないでしょうか。だとしたら、私たちの側としては 逆に、自分たちが決して物のような存在になってはならない、ということではないか。永遠を想い、神を想う内なる思いを与えられた者として、物のようになることなく、神の方に目を向ける。そして、御子が下さる そのいのちにあずかる。それが主イエスを頂くということであり、いのちのパンたる主イエスを食べるということだろうと思います。そのようにして、繰り返し、そしていつも 主イエスを内に迎え、そこにその息吹を注いでもらう。そのとき、私たちは主のいのちに力づけられ、様々な今から新たな先へと押し出されていくのではないでしょうか。私たちはそのようにして生きることを許されているのですから、なんたる恵みかと思わされます。

主イエスを内に迎え、そこで いのちのパンを頂く。日ごとの歩みをそのようにして重ね続けた人たちの例は 現に、決して珍しいものでもありません。私事で恐縮ですが、私個人の想い出としてとりわけ深く心に刻まれている姉妹のことを紹介させていただきたいと思います。それはもう三十数年も前になるでしょうか、私自身がバプテスマをさせてもらった姉妹で、その彼女との再会にまつわる出来事です。

それは 10 年ほど前のこと、実に 25 年ぶりの再会でした。ですが、普通なら懐かしく喜ばしいはずのそれが、そうではなかった。というのも、それはなんと、ホスピスの病室での再会だったからです。しかも、見るからに痩せ細って その身をベッドに横たえている姿から、残された時間がすでにそう長くないのが見て取れました。実際、彼女が召されたのは、それから一月経つか経たないか。48 歳の若さで、御伴侶と二人の子どもさんを遺し、癌で天に戻られました。私は今でも悲しく、や

りきれない思いでいっぱいです。けれども、そんななか、彼女が最期の病床で語ってくれたそのひと言が私にとってかけがえのない慰めとなり、また励ましともなっています。それはこんな言葉でした。「あの時は本当に楽しかったです。先生の説教の中で、あれ以来ずっと 私の中に残ってきたのは、『日々新たに・・・』という御言葉でした。今でも日ごとに新しくされたいと願っています」。私たちの「外なる人」は衰えゆくとも、「内なる人」はキリストによって日々新たにされていくという、使徒パウロのあの信仰の言葉です（Ⅱコリント 4：16)。パウロはその前後で「イエスの命がこの体に現れるため」(同 4：10)「この身にイエスの命が現れるため」(同 4：11）と語り、そして「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」(同 4：18）と述べてもいます。苦難と困難の中での言葉です。

大学時代に教会を訪れた彼女でした。彼女もまた、悩み多き青年期を生きる一人として、人生の先々について思いを巡らせていたのでしょう。そこで聖書のキリストに出会い、バプテスマを受けて、信仰の人生へと新たな出発をしたのでした。いかにも明るく 笑顔の絶えない彼女でしたから、きっと、元気で潑剌とした毎日をおくったものと思われます。ただ、誰しも当然ながら 人生いつも順風満帆とはいかないでしょうから、彼女にもそれなりの闘いがあったにちがいありません。なかでも、御伴侶がクリスチャンでなかったため、教会関係のあれこれに少しく制約があり、祈りがなされていたようです。その彼女が今、そうした人生経路のすべてを纏って、病のその身をポスピスのベッドに横たえている。最期の時を、目の前で刻んでいます。かけがえのないひと言は ほかでもない、そのただ中で語られたものでした。「日々新たに、今でも日ごとに新しくされたい」と。そして なんと、一緒に訪ねた妻と私のために、さらには祈りまでしてくれた。今まさに自分の死と向き合っているその人が、今この時も 日ごとに新しくされたい、と語り、苦痛に必死に耐えているその人が、見舞いにいった者たちを逆に 祈りで包み込んでくれたのでした。彼女はおそらく、そのようにしてずっと生きてきたのではないでしょうか。主イエスのいのちに日々生かされてきた。そして、死に際しても変わらず、そのいのちに生かされている。そんな信仰者の姿を、私は彼女の内に見せられたように思いました。私にとって忘れがたい、大切な姉妹でした。

自分自身のこととしても、私もすでに後期高齢者に近くなり、日本人男性の平均寿命からすると、残る人生はあと 10 年ほどしかありません。そんな年齢的なこともあってか、人生を振り返って考えさせられるときも少なくありません。悲喜こもごも、とはよく言ったもので、いろんなところを通って ここまで歩いてきた。ひと言で言うなら、思い悩みつつ、繰り返し躓きながら・・・と言ったらいいだろうか。でも それは、自分で言うのもなんだが、決して好い加減なものではなかった。自分なりに一所懸命そうしてきた。そして、拙いながらも、そのようにして 一つのことをたずね求めてきたのだと思う。人が真実生きるのは、何によってか？ 何によって、人は本当に生かされるのだろうか、と。今振り返ると、そんなふうに思わされています。言ってみれば、真のいのちの在り処を探してきた、とでも言えるでしょうか。どこまで分かってそうしていたのか、難解な哲学書を読んでは 友だち同士で議論を戦わせたり・・・。人間というものを考え、その心を探り、そして、い

かに生きるかを聖書の言葉に問いかけたり・・・。何年にもわたる、そうした繰り返しの年月。そのすべてが 結局のところ、この肉の命を本当に意味あるものとし、それを真実生かしてくれる そのようないのちを求め続けた年月だったように思います。そして 今、思わされるのです。あちこちにぶつかっては蹴躓いたような歩みだったけれども、主イエスの神は確かに そんな自分をも見捨てることなく、いのちのパンをもって養い、生かし続けてくれた、と。子どもたちに何を遺したいかと問われるなら、私は躊躇うことなく こう答えるでしょう。「自分が食べさせてもらったいのちのパンの在り処を示す、その地図を遺したい」

ヨハネの教会に連なる人々は 私のそれをはるかに超えたところで主イエスのパンを食べ、そのいのちを頂いて、そこで生かされ続けたにちがいありません。彼らが「ヨハネによる福音書」をまとめたのはまさに、そのためだった。そのことを伝えるためだった。すなわち、自分たちがあずかったそのいのちのパンの在り処を教えるためだった、と言えはしないでしょうか。迫害のなか、困難に耐えて生き抜き、そして 事を変える力を与えてくれたのはこのパンなのだ。このパンに一緒にあずかろうではないか、と。そう語りかける彼らの声が、静かに沁み入るように聞こえます。

聖書の時代から二千年を経て生きる私たちは、今このとき、イエス・キリストを目の当たりにすることはできません。主イエスに見えることはできません。しかし、主イエスはここでもまた 言われます。「しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない」(36)。たしかに、人は目で見たからといって、会ったからといって、それで必ずしも信じるとはかぎらないようです。現に、福音書の時代を生きた人々は主イエスの傍らで生き、主イエスを目の当たりにしていました。にもかかわらず、主イエスを信じないどころか、最後はなんと 十字架にまで追いやったのでした。大切なのは つまりは、そこに何を見るか、どんな目を持つか、ではないでしょうか。真実 知るべきもの、真実 あずかるべきものの在り処を見抜く目です。主イエスを追って会堂に押しかけた群衆たちは こうして、事が信仰の核心に至るや、そこで態度を違え、異なる人々に分かれました。主イエスの真意を理解し これを受け入れた者たちと、それを理解せず 主イエスのもとを離れ去った者たちとに、です。パンと魚の あの同じ恵みを頂いた者たちが、異なる道へと分かれていった。同じ恵みを頂いたのに、です。つまり、誰もが同じ言葉を聞き、同じしるしを見、同じ御業にあずかっているのに、その同じ人たちが道を違え、主イエスに赴く者と主イエスから離れる者とに分かれてゆく、という現実。これは、ヨハネの福音書がその全体を通して格闘するとともに、それを読む者たちにも提起している重要な問題と言えるように思われます。それは さらには、追って 52 節以下で言及される 人の子の肉と血をめぐるやり取りとも関連し、ヨハネの教会が生きた その情況をも推察させるものと言えるでしょう。こうしたことから、以上の問題については、次回（6：34～59 を予定）に詳細を回させていただければと思います。

がその一方で 同時に、それにしても、それらは初めから そのように定められていたのだろうか、と そんな疑問を憶えさせられなくもないのではないでしょうか。というのも、例えば 37 節に「父

がわたしにお与えになる人は皆・・・」とあり、また 39 節にも「わたしに与えてくださった人を一人も・・・」というようにあるからです。どちらも 読みようによっては、父なる神が主イエスにお与えになる人々とそうされない人々とがいる、というふうにとれなくもありません。もしそうであれば、救われる人と救われない人とが初めから定められているということに・・・。これははたして、どう理解したらよいのか。この点については 実のところ、代々議論が繰り返されてきたものの、誰もが納得するスッキリした読み方があるかというと、なかなかそうは言えないのが実情で、学者たちの間でも今なお 異なる解釈が交わされています。加えて、41 節以下にも似たような表現が出てくるため、この点についても、扱いを次回にさせていただきたいと思います。

要は、ヨハネの教会に連なる者たちは困難至極のその現実にあってもなお、イエス・キリストに信頼を置き、その信仰を生き抜いた、ということです。まだまだ小さく、足もとのおぼつかない群れにもかかわらず、彼らはそれでも そうした。そうできた、ということではないでしょうか。それは、彼らが肉の命を超えて見る目を持っていたから。それ以上のいのちを見る目を持っていたからだろうと思います。そうした目を頂いていたからこそ、彼らはいのちのパンに生かされて生きた。肉の命の尊(とうと)さを人一倍知っていたからこそ、それを真(まこと)のいのちで生かす道をもよく知っていたのではないか、と そう思わされています。そのような目を、私たちもまた 持てたら、与えてもらえたらと願っています。そのような目が開かれたとき、そのとき 私たちの内に、イエス・キリストから来る新たないのちの息吹(いぶき)が息づき始める。そのように、主イエスが約束してくださっているからです。

折しも、この講解の掲載は 2 月。その 22 日（水）が本年 2023 年の「灰の水曜日」で、「レント（受難節)」の初日となっています。すなわち、受難の十字架（4 月 7 日）の足音が響き始める、その日です。主イエスはここから、ひたすら十字架へと、その歩みを速められました。それは復活のイースター（4 月 9 日）へと繋(つな)がるものですが、がしかし、主イエスの御業(みわざ)の中心は間違いなく、十字架上のそれにあると言えるでしょう。ヨハネの教会の人たちも、その十字架の主イエスを想い起こし、その御姿(みすがた)を見詰めることを通して、そこから 主イエスの下さるいのちにあずかっていったにちがいありません。52 節以下で繰り返される、「人の子の肉と血」「わたしの肉と血」という表現。それは ― 紀元 90 年代とされるヨハネ福音書の編纂時(へんさんじ)には、形式の上でもすでに その進展が見られていたと考えられる ― いわゆる聖餐(せいさん)（主の晩餐(ばんさん)）を想わせもするものですが、そこにまさしく 十字架上に裂かれ また流された主イエスの肉と血とが反映されていると言えるのではないでしょうか。そこに、ヨハネの教会の思いがあった。主イエスの十字架の御業に、その愛の御業に それがあったから、と そう思わされています。

イエスを主と信じる人々は こうして、そのいのちにあずかってきました。その主イエスの真理を何より明らかに伝える聖書の言葉から、そのいのちを頂いてきたのでした。

終わりに、そうした信仰者の愛誦聖句(あいしょうせいく)を幾つか御紹介して、今月の講解を閉じさせていただきたいと思います。私たちと同時代を生きる方々のそれらに絞ってのものですが、それぞれがそれぞれに、

信仰にあるいのちを与えられてきた御言葉です。いずれも、『聖書 新共同訳』の発刊 20 周年を記念してまとめられた『わたしの好きなみことば』という本に収められています（日本聖書協会編『わたしの好きなみことば』日本聖書協会、2007 年)。表紙の帯には「心を自由にする聖書の言葉」ともあり、牧師のみならず、信仰にある様々な方々が自身の愛誦聖句を寄せておられます。

人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。

―マタイによる福音書 4 章 4 節

＊戦後の混乱期に 3 人の子と生きることの辛さを味わいながらの日々の中に（夫は戦死）神への信頼と希望を支えに母子共に生かされて今日あることを只々感謝です。　常野 トキ

人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。

―ルカによる福音書 19 章 10 節

＊少し落ち込むことがあったとき、「本当に神様はいるのか」「イエス様はついていてくれるのか」と不安になるときがありました。しかし、この聖句を含むイエスとザアカイとのやりとりからは、神の恵みが豊かにあることを感じます。　大和 泰彦

真理はあなたたちを自由にする。　―ヨハネによる福音書 8 章 32 節

＊出口が見えにくい時の支えとなっている。言うまでもなく、真理はイエス・キリストであり、イエスに従うときにのみ、本当の納得と解放が得られる。　山岡 三治

＊ナチ政権が登場する頃、ボンヘッファーがこの聖句にもとづいて、時代の流れに敢然と抗する説教をしています。それは、のちにフライブルク大学総長としてヒトラーを支持したハイデガーの哲学に対決するものでした。　宮田 光雄

われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに與ふ。わが與ふるは世の與ふる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。　―ヨハネ傳福音書 14 章 27 節（文語訳）

＊得体の知れない不安なかたまりに胸を圧されていた少女時代のある夕べ、教会の灯を見た時、このみことばがありありと浮かび、せっかく与えられた“平安”を享受していない自分を、神さまに申し訳なく感じたのでした。　木崎 さと子

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ 十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで 自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。　―コリントの信徒への手紙 二 12 章 9～10 節

＊私が学生時代（23、4 歳）アメリカで孤独の中で、自らの信仰をうたがい、祈れなくなったときがありました。この聖句で立ち直りました。　喜田川 信

わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他(た)のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。　　―ローマの信徒への手紙 8 章 38～39 節

＊パウロの宣教の旅路を巡礼したとき、この言葉がずっと心に浮かびました。　小高 毅

〔祈り〕

愛する神様。

持てるものの多さや豊かさばかりに心を惹(ひ)かれ、そうすることで幸せが得られると錯覚をしている今日(こんにち)。どうか、その惑わしにはまることのないよう、私たちの目をあなたに向けさせてください。いのちの源なる内なるものを求めることを忘れないよう、私たちを 真(まこと)のいのちを慕う者としてください。そして、あなたの下さるそのいのちに生かされ、そこで 心身ともに健やかな歩みを保つことができますように。

与えられている肉の命を感謝いたします。肉の命を内なるいのちで満たし、日ごとの歩みをあなたの御心(みこころ)に適(かな)うものとしてください。

受難節へと向かいます。このとき、心からの悔い改めと感謝とをもって 御子(みこ)イエス・キリストの十字架を想う私たちとしてくださいますように。

十字架の主、イエス・キリストの御名(みな)によって願い、お祈りいたします。

アーメン